

## 巻頭言

# 21世紀の看護への期待―「葦」第32号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

病院長 榊 壽 右

“葦”第32号の発刊を祝します。日頃の看護の研究成果や新しい体験をまとめて広く、多くの人々に知らしめることは非常に大切なことです。医学が進み、受け持つ看護の役割も細分化した今日、各個人が看護のすべてを体験することは、最早不可能になったと言っても過言ではありません。この現実を克服する手段として、私達は文章の形で論文として発表し、自分たちの貴重な工夫や経験を“自分たち以外のもの”に分け与え、他人の貴重な工夫や経験を“自分たち”に分け与えてもらえるようにしています。その行為によって、未知の分野の看護に関する事柄も情報として提供され、多くの“看護を共通の職業とする人たち”に知識の分かち合いが出来るのです。そのような意味でこの“葦”第32巻もまた、新たな看護知識の交流にきっと貢献することでしょう。

21世紀には科学がさらに進歩し、看護そのもののあり方や考え方も変化して行くでしょう。そして、もしかしたらロボットが看護をする時代がくるかもしれないと予言している人もあると聞きます。しかし、私は21世紀こそ“人間のぬくもり”を見直されるときが必ず来ると心から信じているのです。どんなに科学が進んでも“人のぬくもり”に変わる道具を作ること等、絶対に出来ないと思うからです。病める人が看護を受けるという意味の中には、単に“物理的に介抱されるという行為”そのものだけでなく、“心の和みや励ましという精神的支援を受ける”といった意味も多く含まれていると信じるものです。病人がどんなに苦しい状況にあったとしても、純白の白衣に包まれた天使のような静かさで穏やかに送り込まれた笑顔を前にして、その日の安堵を感じないものはいないでしょう。このような事柄は科学がいくら進んでも決して解決できるものではありません。看護という業務のなかには、人間のみが果たし得る、なし得る、そして感じ得る“仕事”が多く存在していて、単に数学上の尺度や基準では絶対に推し量れないものが含まれていることを決して忘れてはならないと思います。

“クリミアの天使”と謳われたフローレンス ナイチンゲールの名前は看護に携わっている人ならば誰でも知っているでしょう。そしてクリミア戦争で敵味方の区別なく看護した博愛の看護婦であり近代看護学を打ち立てた人というイメージを持っていることと思います。しかし彼女が近代看護学を確立した背景には、白衣の天使以上に行動家であり、数学者でもあり統計学者でもあり、さらにまた類稀な文筆家でもあったことが挙げられます。ドイツでの看護学校で系統的な看護理論を学んでロンドンの貧困女性病人援護会の会長をしていた彼女のもとにクリミア戦争

での戦病者、戦傷者の看護の依頼が来たとき、直ちに38名のボランティアの女性を組織して戦地に赴きました。そして戦死者よりも戦病死者のほうがはるかに多いという現実にはぶち当たり、これを打破するのは悲惨極まりない野戦病院の衛生環境を改善する以外に方法はないことを確信し、行動を起こしたのです。病人に人間としての深い愛情を示しつつ、“病人を救うのは宗教者の愛よりも衛生環境である”ことを軍首脳部に独創的な統計学的手法を用いて理解させる共に、執筆活動を広く世界に向って展開し、多くの賛同者が得られるよう努力したのです。

患者という人間が対象である限りにおいて、いくら科学が進んでも看護に携わるものの人間的暖かみを否定するようなことがあってはならないことです。一方、看護学は科学的根拠に基づいていなければ、その発展はありえないことです。この“葦”が19世紀になしたナイチンゲールの精神をこの21世紀にも伝え続けるものであってほしいと思います。